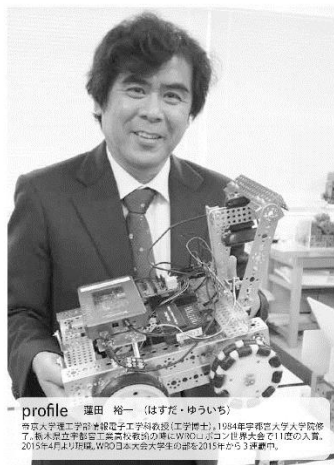


● 6月6日 蓮田先生が下野新聞に掲載されました



profile 蓮田 裕一 (はすだ・ゆういち)  
専攻大学理工学部基礎電子工学科教授(工学博士)、1994年専攻大学大学院修了、新大阪産業創造工学部教授の後にWROコンテスト世界大会で11回の入賞、2015年4月より所属、WRO日本大会大学生の部を2015年から3年連続。

### 小中高大学までの一貫したロボット教育を

今、大学で私たちが手がけていることは次世代の人材育成です。第4次産業革命といわれているこの時代に何をすべきかを大学は考えるべき時期にきています。教員は今や自分の研究だけに終始できる状況ではありません。さらに、地元根ざした取組みを行なうことが大学の義務になるでしょう。その取組みのひとつがロボットコンテストです。

私は宇都宮工業高校に勤務していた頃から、WRO(世界の小中高大学生による国際ロボット大会、帝京大学も3年連続出場)への出場をサポートしてきました。生徒たちは世界大会で数多くの入賞を果たし、研究者に混じって学会や国際会議でロボットの研究成果を発表してきました。第三者から厳しい評価

を受ける経験は彼らを大きく成長させ、世界へと視野が広がっていきました。一方で、東南アジア勢など海外に目を向けると、ロボット教育の分野で日本は世界にかなり遅れをとっていることを痛感します。産業においても生産拠点を海外に移し、現場で育つノウハウも人材も流出しています。このままでは日本の国際競争力はかなり厳しくなるでしょう。

これらの状況下で、日本では2020年から小学校でのプログラミング教育が始まりますが、急ぐべきは子どもたちのみならず、指導者の育成です。今現場の先生がたは一生懸命準備を進めています。プログラミングの楽しさを子どもたちに伝えるのはなかなか難しいことです。指導者の育成には組織的に取り組んで

いく必要があります。さらに子どもたちに対しては、小中高大学と切れ目なく一貫した人材育成プログラムを提供することを実現し、グローバルなエンジニアの育成を目指していくべきだと考えます。WRO2018で帝京大学は世界「第3位」に輝きましたが、そのメンバーは中学・高校でロボット教育を受けていました。問題解決能力を高めていくためには、多くの体験が必要です。そのために、今私は県内の小学生から社会人までを対象とするロボット教室を年間14回ほど行なっています。できなかったことを達成した時の子どもたちの目の輝き、自信を持った姿を見ると嬉しくなります。そのような機会を未来のエンジニアのために今後もどんどん作っていきたいですね。

● 6月23日 蓮田先生がとちぎ放送で1時間の生放送出演



### ロボット世界大会と研究のお話をされました。

● 7月9日 蓮田先生が小山西高校でキャリア出前授業



カピバラさん & うっていも活躍しました

9月1日の文化祭で再見